

## そと まち 遺 跡 外 町 遺 跡

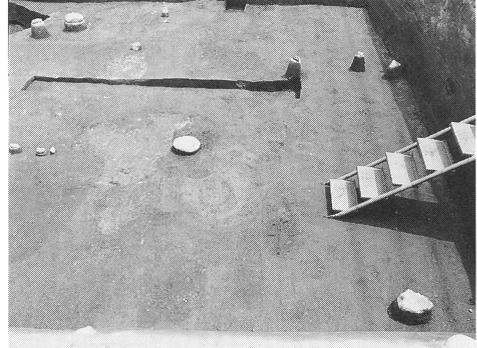
### 調査の経緯

外町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川左岸の標高3m前後の自然堤防上に立地し、行政的には、西春日井郡清洲町・新川町の境界付近に位置する。遺跡は中世以降の美濃街道に面しており、北方に清洲城下町遺跡が広がっている。

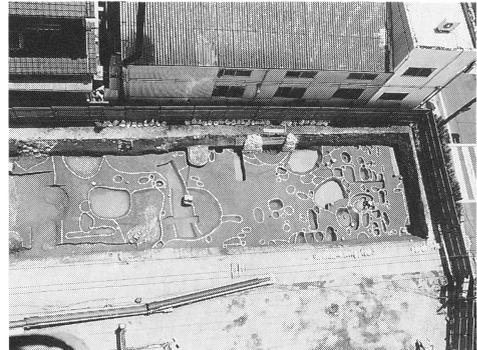
今回の発掘調査は、県道新川・甚目寺線建設に伴い、平成3年度に引き続き実施したものである。本年度は、5月から7月まで、680㎡にわたって調査した。

調査は、湧水に悩まされたが、江戸時代後期頃の居住域や田地を確認し、江戸時代前期から中期頃の柱穴群や礎石群を検出した。

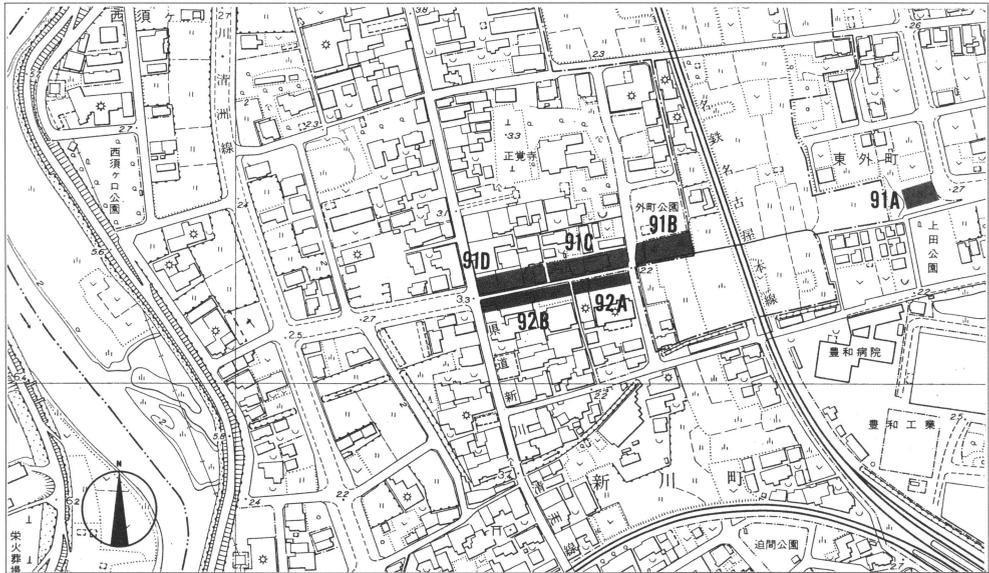
(大竹正吾)



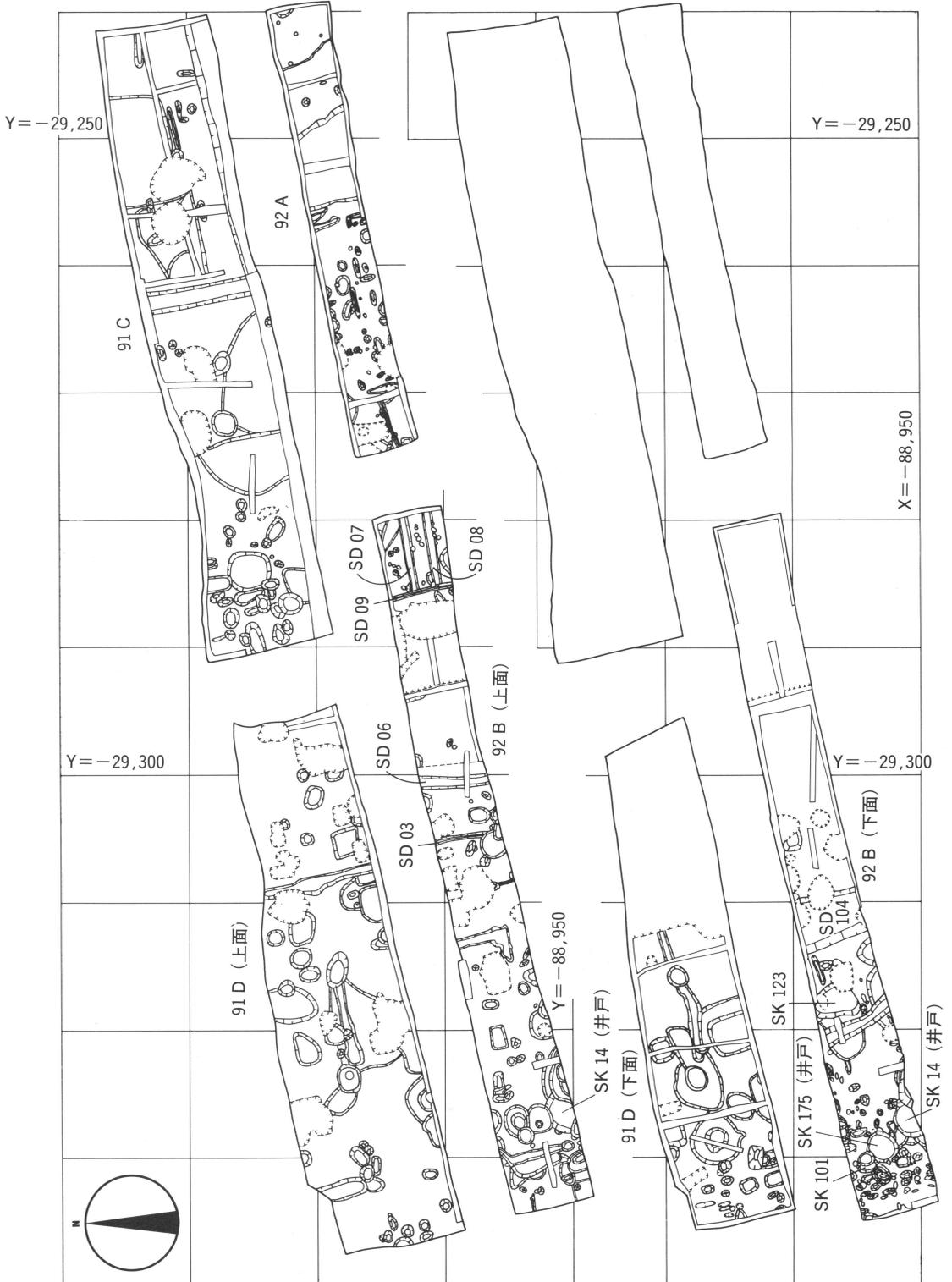
B区下面検出状況



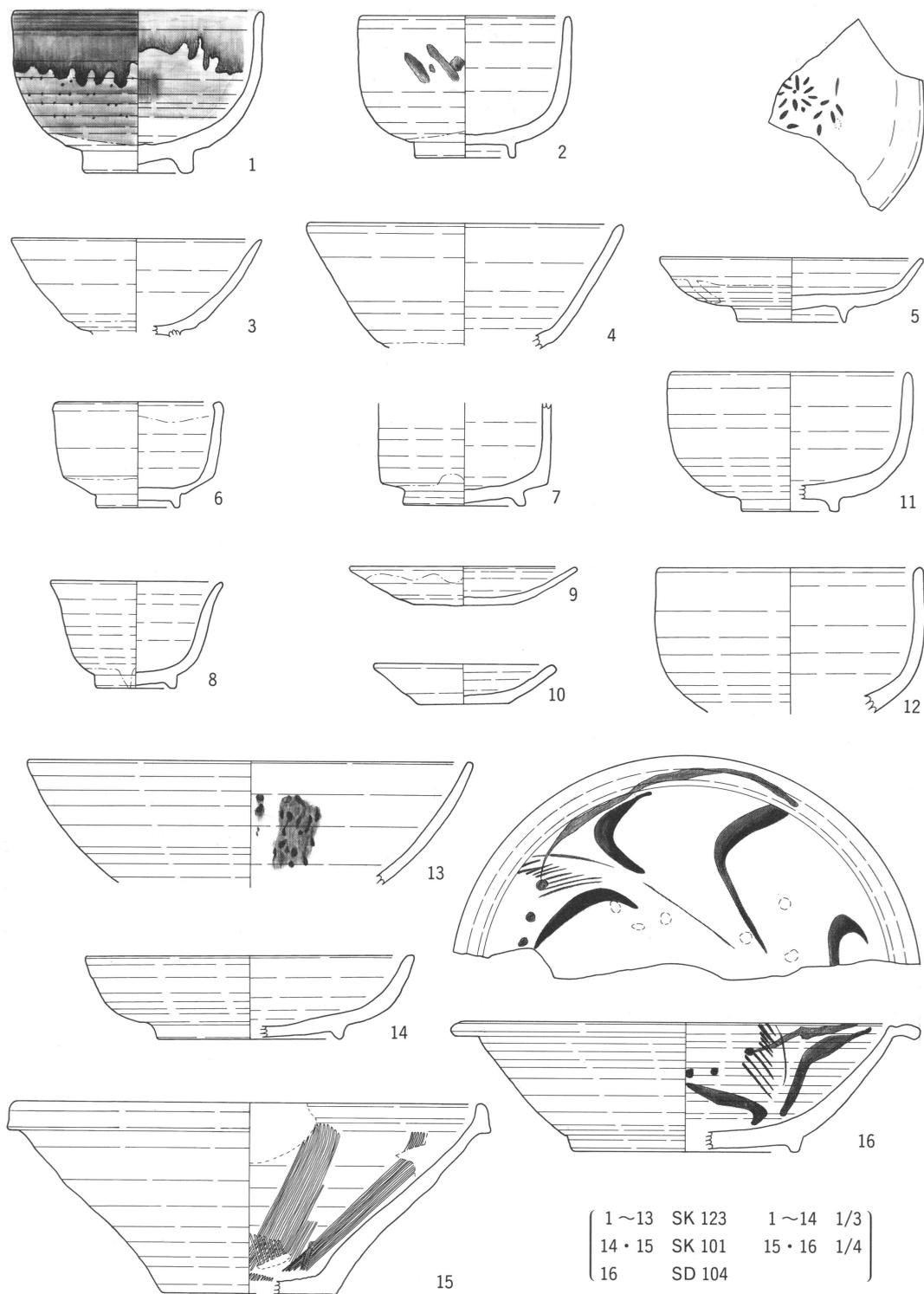
B区下面調査区西半（北より）



第1図 調査区位置図 (1/5000)



第2図 遺構配置図 (1/500)



第3図 出土遺物実測図

## 調査の概要

今年度は、A・B区2つの調査区において調査を行った（第1図）。

### 遺構（第2図）

**A区** 表土を剥すと灰白色の砂が、さらにその下から田の床土と思われる灰黒色シルトが現れた。この床土を剥した面で遺構を検出したが、出土遺物がほとんどないため遺構の時期を明確に確認することができなかった。

**B区** 調査区東半では、A区とほとんど同じ状況であったが、S D07・08で山茶碗の破片が出土していることから、ピットや溝は室町時代頃の遺構と考えられる。調査区西半では、昨年同様2面調査を行った。上面では江戸時代後半の遺構を、下面では江戸時代前期～中期頃の遺構を確認した。特に、下面では、廃棄土坑・井戸などのほか、昨年度の調査では確認されなかった柱穴群や礎石群が検出されており、美濃街道沿いの町屋建物を想定することが可能となった。

### 遺物（第3図）

出土遺物としては、江戸時代後半を中心とする瀬戸・美濃産の陶磁器類が大多数を占めている。1は尾呂茶碗、2は呉須絵の丸碗、3・4は灰釉の平碗、5は鉄絵（刷絵）の丸皿、6は灰釉の筒型碗、7は灰釉の汁次、8は灰釉の端反碗、9は鉄釉の灯明皿、10は土師皿、11・12は灰釉の丸碗、13は鉄絵の丸鉢（以上S K123）、14は志野の丸皿、15は大窯期で錆釉の播鉢（以上S K101）、16は笠原鉢（S D104）である。

その他、常滑産の甕・火鉢、在地の内耳鍋・焙烙、肥前磁器である染付の碗・皿類、山茶碗類、多量の瓦などが、包含層や遺構内から出土している。

### まとめ

上面においては、昨年度の調査結果と同様、江戸時代後期の町の様子を伺うことができる。91D区と92B区的美濃街道沿いには居住地があり、溝によって区切られていたようである。溝の東側には、畑地や田が広がっていたようである。今年度の調査区では区画する溝が明確ではないが、S D03かS D06を想定することができる。

また、下面では、江戸時代初頭には人々が住んでいた形跡がみられ、清須城下町の外町として17世紀初頭には町が形成されていたことが明らかになった。さらに、室町時代の遺構の存在から、江戸時代以前にもこの地域に人々が生活していたことが推定される。

最後に、昨年指摘した約1mの盛土が、『清洲町史』にみられる五条川瀬違え（1794）に伴う町割りの再編という人為的な造成ではないかと想定したが、今年度の調査では上面と下面との遺構から出土した遺物の時期差に明確な結果を得ることができなかった。このことは、来年度発行する報告書の中で明らかにしたい。

（小嶋廣也）